

近代世界システムをどう教えるか

－いわゆる「大航海時代」をどうとらえるか－

七里ガ浜高等学校 鈴木 健司

はじめに

「世界史の勉強は、なぜ時代を行ったり来たりするのですか」

高等学校で世界史を教えるようになってから、生徒からよくこのように質問されるようになった。確かに世界史は多くの地域を学ぶことから、一つの地域を7世紀から14世紀まで学習したら、また別の地域の4世紀から15世紀までを学ぶといったことを繰り返していく。それらの横のつながりこそが世界の歴史であって、お互い関連し合いながら様々な影響を与えあう、それこそが世界史の醍醐味であると説明しているが、それが実感できるようになるには、多くの時間と学習が必要なのだろう。中学校で古い時代から新しい時代へ一直線の日本史を学んできた彼らにとって、それは一つのハードルであるようだ。

折しも本校では、昨年度から1年生必修の世界史Bは古代からではなく、近代から学ぶのがよいのではないかという提起がなされ、今年度から実施される運びとなった。近代から学ぶことで、現代の「一体化した世界」につながる歴史を理解できるようにすることが、全員が学ぶ必修世界史としてふさわしいのではないかという考えが担当間で一致した結果である。

そのなかで、今年度の世界史研究推進委員会において、「近代世界システム」がテーマの一つとしてあげられたことをきっかけに、11月に行うことになっていた研究授業のテーマにしようと思い立った。使用している教科書に「近代世界システム」を学習する独立した単元はないが、平成25年度以降用『新詳世界史B』（帝国書院）を参考に、4月から10月にかけて16世紀から19世紀前半までの西洋史を学んだ生徒たちへ、それらを俯瞰する形で「世界システム」という考え方を学んでもらうことがねらいである。

また苦手としている生徒が多い世界史という科目を、どう好きになってもらうか。生徒が主体的に取り組む授業ができないか。こうしたことも念頭において、授業を計画した。幸運にもそれがこうした発表の機会を与えられたことに感謝したいと思う。

1 西洋世界はなぜ海外進出をおこなったのだろうか

近代史から学習をスタートさせるとして、担当間でまず議論になったのは、どの時代からそれを始めるか、ということであった。カリキュラム編成の都合上3単位で行わざるを得なくなっていたため、到達目標を第二次世界大戦においた以上、あまり余裕はなかった。結果、「主権国家体制の形成」から始めることになったが、これは今後も検討の余地があると感じている。

そのことから4月のスタートでは、いわゆる「大航海時代」については概略的に学習しただけであったので、まずそこを起点に授業を組み立てることにした。1時間目にポルトガル・スペインの海外進出、2時間目にオランダとイギリスの興亡、3時間目にイギリスの覇権、とつながっていくなかで「近代世界システム」が成立した、という流れである。なおこの授業は、本校が昨年度から総合教育センターと連携して取り組んでいる授業改善

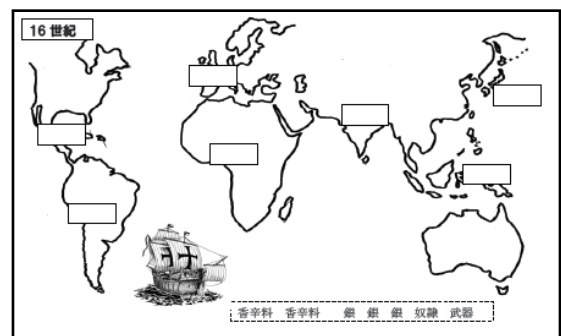
プロジェクトの一環として行った。録画されたビデオと並行して、取り組みを解説していきたい。

本時である1時間目では、ポルトガルとスペインがなぜ海外に進出していったのか、ということテーマにして行った。まず、15世紀後半のヨーロッパの動きを概説した上で、ヨーロッパの地図から、大西洋に面した両国の地理的な側面に注目させる。そして教科書から両国の海外進出の要因を読み解かせ、それをワークシートに箇条書きさせた。なお読むことに集中させるためと、読めない漢字を確認させるため、多少時間はかかるが、普段の授業から音読を実施するようにしている。そして、3～4人でグループを作らせ、お互い書いた内容を確認させた上で、代表者に前に出て黒板に書いてもらった。書いている間には教室を回り、待っている生徒たちに机間指導を行った。書き終わったあとは、その内容をベースに解説を行い、その際ヨーロッパ人たちが執着した香辛料とはどういうものか実感してもらいたく、実物サンプルを用意して、匂いのかいでもらった。内容を要約すると以下ようになる。

- ① マルコ=ポーロの話などに刺激されて、香辛料や金銀などアジアの富を入手しようとした。
- ② キリシト教（カトリック）を海外に布教しようとした。
- ③ 羅針盤の改良、帆船の発達などで遠洋航海が可能となった。

次に実際の両国の進出をワークシートの白地図上で説明し、記述させた。私が世界史の学習において最も力を入れて指導していることのひとつが、地図作業である。世界の様々な事象がどこでどのようにおきたのか、様々な地域がどのように関わっているかを理解する上で、地図での学習は欠かせないが、生徒たちの地理的な知識は不十分であることが多い。ゆくゆくは自分でノートに簡単な地図を書いて、表現できるようにすることが目標であるが、そのためのステップとして白地図作業を積極的に行っている。

そして、両国が海外に進出した要因の一つである、世界の魅力的な産物がどこにあり、どのようにヨーロッパへ持ち込まれたかを資料集をつかって調べさせた。わかりやすいように商品はできるだけシンプルにし、また調べやすいように商品名を選択肢でワークシートに



載せている。

こうしたポルトガル・スペインの海外進出をきっかけにして、新しい交易の流れが生まれたことが、その後の「世界の一体化」と呼ばれる現象につながったことを説明し、それを「近代世界システム」として理論づけたのがウォーラステインという学者である、としてまとめを行った。

2 近代世界システム論を越えて

以上は、従来の「大航海時代」としての教え方にのっとって取り組んだものである。果敢にも未知の海に乗り出したヨーロッパ人が、新しい航海ルートを切り開き、ついには世界を一体化させた、というようなストーリーが従来の高校世界史における一般的な流れであろう。そうした見方に立てば、自ら海外進出をし、資本を蓄積させて、いち早く産業化を成功させたヨーロッパが先進国となり、頑張らなかつた地域は「遅れて」しまったということになる。それに対して「近代世界システム論」は、ヨーロッパ主導で「世界の一体化」が始まり、ヨーロッパが世界の「中核」の位置を占めたが、そのせいで非ヨーロッパ世界が次第に「周辺」とも呼びうる従属的な立場に立たされることになってしまったとして、ヨーロッパの「陰の像」を強調する内容になっている。

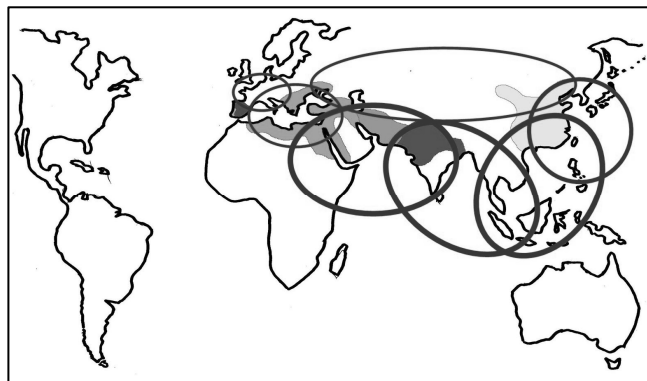
しかしそれでも「ヨーロッパが世界の主役である」という点では従来と変わらないのではないか、そのようなイメージで本当にいいのだろうかという疑問が新たな研究者から出てくるようになった。そこで「近代世界システムをどう教えるか」を出発点にしながらも、そのシステム論の問題点を克服しようとする新たな考え方を加えて、どのような授業を組み立てていけばよいか、構想を考えることにした。

近代の世界は一つのまとまった構造体をなしているのでは、歴史は「国」を単位として動くのではない。すべての国の動向は、「一体としての世界」つまり世界システムの動きの一部でしかない。それは、ヨーロッパもアジアも同じ時を共有しており、同じコースをおしあいへしあいしながら進んできたということである。

そのような立場に立つと、従来の教科書や世界史資料集に出ている地図には、いかにも誤解を招きやすいものもある。なぜなら、ヨーロッパ人の活動にのみ線が引かれているからである。アジアには、ヨーロッパ人が来るより以前から、広大な地域を結びつける交易ネットワークが存在しており、ヨーロッパ人は、そのネットワークに「細かい線で」参加してきたにすぎない。実際、アジアの商業、農業、製造業など総合的な力はかなりの間、ヨーロッパを圧倒していたと言ってよい。アジアにはヨーロッパが欲したものが相当数あった。しかし当時のヨーロッパには、世界商品となるような見るべき産物はなかつたのである。

そうするとポルトガル人、スペイン人の活動も違った形に見えるのではないだろうか。アメリカでは、鉱山開発やプランテーションなど「生産」の組織化を行っているが、アジアにおいては、既存の広域商業ネットワークに寄生する形でのつかったにすぎない。ポルトガルはマラッカに交易拠点を築き、香辛料貿易を独占しようとしているが、失敗しており、マカオや長崎での貿易許可を得、それらの間で絹や陶磁器、銀などを運ばせてもらう利益で糊口をしのいだ、という見方もできる。彼らは新たな貿易ルートなどを開発する必要もなく、旧来のネットワークに新参者として「参入」するだけで十分だったのである。

こうした視点で「大航海時代」を教えるとするれば、まず地図には、それぞれの「地域交易圏」を取り入れ、その上にヨーロッパ人の航跡を書き入れたい。明帝国やムガル帝国、オスマン帝国などの勢力範囲に色をつけておくこともアジアの交易圏をイメージさせるのに役立つだろう。そしてアジア主導の交易圏にヨーロッパ人が参入した、というとらえ方に気づかせる。



最終的には、世界経済の覇権がポルトガル・スペインからやがてオランダ・イギリスに、そしてアメリカに移っていった、という単純な世界史イメージではなく、多様な構造があったことを読み解く力を身につけさせることが世界史を学ぶ意義であると考えている。

3 授業を終えて

今回の発表は、従来の教科書や資料集を用いて、一通り授業を行ってみたあと、再検討するなかで、授業での「世界システム論」からのとらえ方が不十分であったことを踏まえ、1時間目だけを取り上げて、再構成したものである。

今年度は1年生の世界史B(3単位)を2クラス担当したが、どちらも世界史の学習に積極的であり、調べたり、前に出て書いたりすることを意欲的に行う生徒が多く、そうした生徒たちに大いに助けられた授業となった。ワークシートは回収して、生徒たちの取り組み状況を確認したが、しっかりと記述され、地図も色分けして書き込んでいる力作が多かったことは望外の喜びでもあった。続きの2時間目の授業では、ポルトガル・スペインを追いかける形でオランダ・イギリスが参入してくることを学びながら、近代世界システム論による「中核」「周辺」といった構造図を学習したが、やはりその両方を1時間で行うことはかなわず、2回にわけて行った。3時間目も同様である。

またこれらの取り組みのなかで再確認したのは、歴史の出来事の因果関係を考え、自分で説明できるようにすることの重要さであった。歴史の学習において、生徒たちはとかく用語を覚えることに集中するあまり、「なぜそうなったのか」を置き去りにしてしまうことが多い。授業者としても、進度を気にするあまり、考えさせる前に説明してしまうことが多かったことがいつも心に残っていた。今後もこうした生徒が主体的に取り組める歴史学習を積極的に取り入れていきたいと思っている。

4 質疑応答

「今回の授業実施でクラスの生徒たちは非常に熱心に取り組んでいる様子がうかがえたが、普段の授業ではどのように行っているのか。また生徒を能動的に学習させるためにどんな指導を行っているのか。」

普段の授業では、音読をしたあと板書を行っている。板書のなかには穴埋め式の問題をつくってあるので、生徒たちはノートに書きながら教科書や資料集を読み、答えをさがして記入する。そして指名された生徒7～8人が前に出て、一人がひとつ黒板に答えを書く

が、早い者勝ちなので、生徒たちは自分がわかる答えを早く書こうと、我先に飛び出してくる者が何人も出てくる。難しい箇所当たってしまった生徒は、他の生徒と相談しながら答えを書いたり、こちらからヒントを出して調べさせたりしている。

担当クラスの生徒たちは、このスタイルに慣れてくれたので、調べれば答えが出てくるものに取り組んだり、前に出て書いたりすることには大変積極的である。あまり難しくなく、少しやればできそうな課題を与えることが、今のクラスの生徒たちにはうまく合ったのではないかと考えている。

本時の取り組みでは、歴史の事象の要因を調べて書く、という通常より分量の多い課題を与えたが、教科書に書いてあることなので、こちらが予想する以上にうまく対応し、熱心に取り組んでくれたことは幸いであった。今後はもう少しハードルを上げて、単純に調べるだけではなく、自分で要因を考えて書くような課題を与えて取り組ませることが目標である。

《参考文献》

川北稔『ヨーロッパと近代世界』放送大学 日本放送出版協会（2001）

〃 『砂糖の世界史』岩波ジュニア新書（1996）

神奈川県高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会編『世界史をどう教えるか』

山川出版社（2008）

水島司『グローバル・ヒストリー入門』（世界史リブレット127）山川出版社（2010）

小川幸司『世界史との対話－70時間の歴史批評－（中）』地歴社（2012）

単 元 指 導 案

- 1 科目名（学年） 「世界史B」（第1学年）
- 2 単元名 「近代世界システムを考える」
- 3 使用教材 『詳説世界史B』（山川出版社） 『アカデミア世界史』（浜島書店）
- 4 単元で付けたい学力

ルネサンスと宗教改革，新航路の開拓，主権国家体制の成立，大西洋貿易に関する学習を基に、16世紀から18世紀にかけてのヨーロッパ世界とアメリカ・アフリカとの関係を考察する力。

- 5 単元の評価規準

- ・近代世界システムについて興味を持ち、課題に積極的に取り組もうとしている。（関）
- ・ヨーロッパ勢力の海外進出から始まった「世界の一体化」を、近代世界システム論を用いて的確に考察している。（思）
- ・近代世界システムの模式図について理解し、表現することができる。（技）
- ・世界各地からヨーロッパにもたらされた産物について理解している。（知）

6 単元の指導計画

時	評価の観点				評価規準	評価の方法	学習活動 思考力・判断力・表現力等の育成の具体的方策	実施日	
	関	思	技	知				3組	4組
1 (本時)	○	○			<ul style="list-style-type: none"> 世界の一体化に興味を持ち、課題に積極的に取り組もうとしている。 (関) ポルトガルとスペインが海外進出をした理由についての確に考察している。(思) 	行動の観察 プリントの記述の確認	(プリント No.101) 既習事項を振り返り、15世紀後半のヨーロッパやレコンキスタについて確認する。 16世紀、ポルトガルとスペインが海外進出をした理由を考える。	11/9	11/14
2			○		<ul style="list-style-type: none"> 近代世界システムの模式図について理解し、表現することができる。 (技) 	プリントの記述の確認	(プリント No.102) 17～18世紀のオランダやイギリスを中核とした近代世界システムの概要を模式図に表す。	11/13	11/16
3	○			○	<ul style="list-style-type: none"> 世界システム論に興味を持ち、課題に積極的に取り組もうとしている。 (関) 世界各地からヨーロッパにもたらされた産物について理解している。 (知) 	行動の観察 定期テスト	(プリント No.103) 18～19世紀の世界システム論について確認する。 ヨーロッパにもたらされた各種産物の産地はどこであるのか考える。	11/16	11/19

関：関心・意欲・態度 思：思考・判断 技：資料活用の技能・表現 知：知識・理解

7 授業展開例

(1) 本時の目標

スペインやポルトガルは対外進出に乗り出し、南北アメリカ大陸を「発見」した。そこには先住民による独自の文明が栄えていたが、両国は現地の文明を破壊し、不平等な経済的分業体制に組み込んだ。なぜそのようなことになったのかを考え、それらを可能にした両国の活動を考察し、理解する。

(2) 本時の指導過程

分	学習活動	指導上の留意点
導 入 5 分	<ul style="list-style-type: none"> ・今までの学習（主権国家体制から二月革命まで）を振り返り、大航海時代が始まった15世紀後半のヨーロッパやレコンキスタについて確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ヨーロッパの地図から、ポルトガルとスペインの地政学的な側面に着目させる。
展 開 40 分	<ul style="list-style-type: none"> ・4人班を作り、課題1に対する意見を出し合い、それらをワークシートに簡条書きする。 <p data-bbox="311 672 399 705">課題1</p> <p data-bbox="351 716 750 795">「なぜポルトガルとスペインは、海外進出をしたのだろうか」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・班の代表1名が班で出された意見を一つ選び、黒板に書く。 <ul style="list-style-type: none"> ・スペインとポルトガルの海外進出の様子を確認する。 <ul style="list-style-type: none"> ・各自、課題2に取り組む。 <p data-bbox="311 1198 399 1232">課題2</p> <p data-bbox="351 1243 766 1366">「ポルトガルとスペインの海外進出の結果、両国に何がもたらされたのか」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指名された生徒は板書した地図の空所にあてはまる語を解答する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書や資料集を読ませ、アジアの富に関心を持っていたことに気付かせる。 <ul style="list-style-type: none"> ・黒板に書かれた発表をフォローしながら解説する。 〔話し合い5分→黒板5分→解説10分〕 <ul style="list-style-type: none"> ・両国の進出状況や地名を黒板の地図に記入し、位置を把握させる。〔解説5分〕 <ul style="list-style-type: none"> ・世界の産物の分布を、資料集を使って調べる。そしてそれがどのようなルートで移動したか（取引されたか）を、白地図に記入させる。 〔調べる3分→黒板2分→解説5分〕
ま と め 5 分	<ul style="list-style-type: none"> ・新航路発見後の貿易関係の変化を図でまとめる。 ・次回の予告 ポルトガル・スペインを追いかけて、オランダ・イギリスが進出する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートの図に各自で記入を行う。